

パチンコ歴50年。「楽しくも  
あり、苦しくもありでしたね」と、悟りに近い心境で半生を  
振り返った70代後半のYさん。い  
まなお通い続ける「現役」である。  
Yさんの行きつけのパチンコ店の  
近くの喫茶店で会った。薄緑色の  
ブルゾン姿。頭髮は薄くほとんど  
白髪。笑顔を絶やさない好々爺と  
いう印象。アイスコーヒーにたっ  
ぷりガムシロップを入れた。Yさ  
んは、「昔から甘党でね。酒もタ  
バコもやりません。もちろん博打  
も」と笑いながら話した。「うん？  
ちよっと待てよ、パチンコも博打  
ですかね、世間では」と自嘲気味  
に付け加えた。こちらからの質問  
をさえぎるように語る口調から、  
話好きという印象を持った。世の  
中の酸いも甘いも知り尽くした余  
裕も感じた。

### 合併で肩身が狭い息子 追いうちの言葉に休職

人の生き方は様々、と言ってしまえばそれまでだが、半世紀に及ぶパチンコ人生の生き様には興味があつた。Yさんと話していると、依存という現象は何だか小さな問題に見えてくる感じさせられた。

# パチンコ依存 第6回

相談現場からの報告

柏木 勇一

産業カウンセラー・家族相談士

## 50年楽しんで「意思が弱い」 こう言う親父は依存症ですか

なぜこの高齢のYさんと会ったのか。発端はYさんの長男で30代後半のM男さんの相談を受けたことだった。M男さんには離婚歴があつた。子どもはいない。金融機関のシステム保守担当として勤務し、実家に近いアパートで一人暮らししていた。会社が吸収される形で合併したことでM男さんの歯車が狂った。

保守管理しなければいけないシステムの規模が拡大した。対等合併という発表だったが実態は違う。合併相手の会社の方が知名度も高かった。最初から合併相手のメンバーが仕切る場面がほとんどだった。能力も彼らの方が優秀だと認めざるをえなかった。M男さんたちは肩身の狭い立場になった。自然に指示命令を受けるようになり、深夜までの残業の日々が続いた。金融システムは小さなトラブルでも顧客に大きな影響を与える事態になりかねない。ことのほか神経を使う仕事だった。ミスは許されない緊張した雰囲気。ちよっとした雑談もできない。睡眠時間も満足に取れない状況で、仕事の能率は落ちていった。もう我慢できない、辞めたい、と悶々としていた。

明らかに休養が必要な状態だった。専門医の受診を薦めた結果、「うつ状態。1か月の休養が必要」という診断書が出た。合併先会社出身の上司はしぶしぶ認めたが、別れ際「性格の弱い奴だ。逃げたな」という言葉が聞こえた。自分とあまり年齢が変わらない上司のこの言葉に、M男さんはショックを受けた。「こんなに人格否定する人間と一緒に仕事をしたくないと思いました」と強い口調で語った。

## 「親父はすごいな」と 「親父はすごいな」と

有休と病欠扱いで基本給は保証されていたので、休養中を転職先を探す期間に当てるつもりだった。生活費節約のため実家で食事をした。年離れた両親を心配させたくないため、真相は語りたくなかったが、休養はすぐばれた。実家の父親はほとんど家にいなかった。まだパチンコをやめていないのか、と察しがついた。母親は「もう50年もやってるんだから、死ななきや治らない病氣よ」と諦めていた。

M男さんは父と話すためにパチンコ店に入った。いったん台を離れた父親は休憩コーナーに移り、

親子の対話が持たれた。苦しい胸のうちを明かそうという父親との対話の舞台としては、場違いな印象を持ったM男さんだったが、誰にも邪魔されないで話せる場所とも思った。「離婚の後は失業か」と父親は天井をじっと見つめながら語った。さらに「仕方ないな。病気だけは悪化させるな。何とかなるよ」と慰めた。怒鳴られることも覚悟していたM男さんは、ちよつと拍子抜けしたが、昔から飄々とした父親に接してきたことを思い出した。父はゆっくり台に向かい、自分は店を出た。

時間つぶしと気晴らしにM男さんも違うパチンコ店に入った。マイペースで1時間、自分の小遣いと決めていた金額で終えた。勝ち負けの差が激しく痛い目に会うことが多いことは、父親の生活で嫌めながらM男さんは「親父はすごいな。50年間も続けているのだから」と感服に近い思いを持った。

面談を重ねていく中でM男さんは、父親のパチンコ通いを教えてくれたので、父親への興味を持った。世の中の常識からは外れるかもしれないが、ぶれない生き方の秘訣を

知りたくて父親との面談の仲介を依頼した。「これからの息子さんの人生やり直しのためには家族の協力が欠かせませんから」という理由を作った。「どうせ暇ですし、息子のためになるなら会いましょう」という返事をもらえた。

## 妻にも同僚にも隠さず 週2回を楽しみにして

50年のパチンコ人生を語ってくれたYさんには独特の「パチンコ哲学」があった。そもそもなぜのめりこんでいったのか。Yさんが20代の頃、パチンコはうまくいけば1000円でも十分楽しめた。交代勤務で夜勤の日、少し早く家を出て喫茶店で仲間と話し合うのが日課だった。会社から最寄り駅まで歩いて10分、その駅前通りにはパチンコ店がいくつもあった。ある日、コーヒー代の範囲でちよつと遊んでみようかと店に入った。学生時代にも経験があるので初めてではない。勤め帰りのサラリーマン客ではほぼ満員状態。退社後にこれだけの人々がパチンコに興じているのか、とYさんはその人気の高さに驚いた。その日、予定の時間まで玉を買い足すこともなく

過ごすことができた。ハイライト2箱のおまけまでついた。

すぐに、週2回の夜勤の日、出勤前の日課になった。時間をつぶすにはもってこいの空間だった。玉の動きを見つめるところもあれば、自然に手を動かしてこれからの仕事の段取りを考える。騒音が逆に自分ひとりの静けさを作ってくれる感じもした。酒は飲まず、囲碁を打つのが唯一の趣味というYさんにとつて、パチンコ台に向かうのはひとりでも過ごす至福の時になっていった。やがて、日勤で定時帰りの時も寄り道するようになってきた。恥ずかしいことをしているわけでもないし、隠すようなことでもない、Yさんは同僚にもパチンコ宣言をしたし、妻にも「面白いかことを始めたんだ。大丈夫迷惑をかけないから」と告白した。日勤が終わる頃、「もう帰るのかい？パチンコだね、きょうも。君は飲まないからな」「楽しむ程度で抑えておくんだよ。分かっているだろうけれど」という先輩や仲間の声を背に会社を出た。

回数を重ねるにつれて当然勝ち負けを繰り返した。毎月の子算額を決めていたつもりだったが、オ

「パーする月も出てきた。几帳面なYさんは、パチンコ日記として小さなノートにその日その日の金額の出入りをつけていた。入社して5年、10年、20年と経過し、職位も上がり、仕事内容もいくつかわわり、部下を持つ立場にもなった。変わらなかつたのはパチンコ。子どもが大学に入り、卒業して社会人になってもやめなかつた。机の中にしまつてあるノートも増えていった。

## 人生変転も打ち続け 資金そつと足した妻

こんな夫婦間のエピソードも語ってくれた。家計管理はすべて妻の役割。厳しい「大蔵大臣」だった。ある時から、Yさんの小遣いは妻からYさんの口座に入金されるようになった。「妻は現金を渡すことのために金があつたようです。夫が稼いだ金だったからでしょうか」。

実はこのやり方でYさんが助かったことがあつた。時々パチンコの資金が足りなくなつた時、なぜか口座に余分の金額が振り込まれていた。「顔を見れば分かるの。ここはちよつと手伝つておこうか

など思つて。不機嫌な夫がいるのはこつちも嫌だから」と、妻は真相を語ってくれたという。酒も飲まず、遊ぶ人でもない。休日や夜勤前の日は子どもの相手もしてくれただ。そんな夫への妻のお返しだったのかなとYさんは考えた。そしてここまでされると、Yさんは借金までしてパチンコをする気にはならなかつた。泥沼に入りこまないようにという妻の深い読みがあつたのかもしれない。

「妻は一枚も二枚も上手でした」とYさんは述べた。晩婚で40歳過ぎてから生まれた子どもの大学までの学費や老後に備えた貯金、やりくりしながら仕切つてきた妻あつての自分という思いだった。

## 時間帯を見切る哲学 でも家一軒は損した

Yさんのパチンコ歴はそのまま機械の歴史でもあつた。台の釘を見て勝手に「これは行けるぞ」と

決め付けていた時代から、コンビユーター制御されるようになった近年との違いは、スピード感だけではなく、Yさん流に理屈をつければ「時間でコントロールされている」という解釈だった。負けがこんでこれ以上やっても無駄と感じた時、Yさんはしがみつくとなく台を離れて店内を歩いた。どの台もあまり出は良くなかつた。たまたまだつたかもしれない、自分の調子が良くないからそう感じたのかもしれない。その時直感のように閃いたことは「この時間帯はダメだな」ということだった。店の関係者や他の愛好家からは笑われるかもしれないが、Yさんはこの「時間制御」という解釈を勝手に作り、勝手に信じた。

定年後20年近い現在でもこの自己流の信念は変わらない。年金の4分の1を限度に、教会所に行く以外は行きつけの店へ。「週3日ぐらいかな。今は毎日が日曜日です。朝からでも午後何時からでも気分次第です」という。現在の習慣は、まずゆっくり店内を回る。なじみの顔も多い。笑顔で会釈しながら出具合を観察する。そこから調子のいい時間かどうかを占う。



ダメだと思ったら何もしないで休憩。米寿を前にしたYさんの悠々たる

「パチンコ哲学」である。

2、3質問をしてみた。

——自分をパチンコ依存と思ったことはありますか？

「生活の一部になってしまったし、回数だけから見れば依存でしょうかね。ただ借金してまで稼ごうと思ったことはなかったな。時間つぶしから始まって、いつのまにか生活時間が支配されるまでになった。皮肉でしょうか？何の因果ですかね。後悔はしていません。現に楽しんでますから」

——もしパチンコをしていなかったらどうだったんでしょう

「そんなことは分からないよ。言えることは家1軒は建っていたということかな。これは間違いない。まあ妻に甘えていたことと意志が弱かったこと。それだけです」

## 行動選択のプロセス 「神経経済学」に期待

Yさんの口から本音かどうかは分からないが「意志が弱い」という言葉が出た。省みると、私たちの生活はほとんどが意思決定の連

続である。意思決定と表現するとちょっと難しい話のように伝わるかもしれないが、毎日の生活を振り返ると誰でも経験していることに気づくはずだ。レストランでハンバーグにするかステーキを頼むか。居酒屋で日本酒にしようかチューハイにするか。勤務時間の定時を過ぎて、きょうはここで引き上げるかもうちょっと頑張って仕事をするか、などすべて意思決定しているはずである。

このような日々の行動選択のプロセスを解明する学問が2003年以降欧米の脳科学者の間で誕生している。題して「神経経済学」。日本でも茂木健一郎氏の著書や翻訳書に登場している。要略すれば、「人間の意思決定は単純に割り切れる話ばかりではなく、行動も予測不可能であり、その行動には何らかの理由と目的が隠されている」という考えで、心理学の世界にも大きな影響を与えている。

パチンコ依存との関係はどうか。金銭に関わる意思決定という見方から依存行為に迫る考え方があろう。金銭とは距離を置いて長年パチンコを楽しんできたYさんのケース

からは少し離れるかもしれないが、20代の人を対象にした実験結果がある。「きょう1万円が手に入る。しかし10日後まで待てば10万円になる。どちらを選ぶか」という場面、目の前の1万円を選ぶ人が多かった。まず先に手に入るものが欲しい、これが生き物としての本能と解説されている。このような心理がその場その場で「手に入るお金」と信じ込んで繰り返ししているのではないか、という分析につながる。

これまでも、人間は必ずしも合理的な存在ではなく、感情や権威などに心理的影響を受けて活動していると言われてきたが、こうした行動が神経経済学で裏付けられたとも言える。パチンコを含めたギャンブルにはまってしまふ心理状態が脳科学からさらに解明され、依存症治療の新しい道が開かれるかもしれない。

## 余裕もった生き方を 送りにくい世の中に

これまで6回に渡って相談現場で対応したパチンコ依存について、学問的背景も探りながら触れてきた。最近「依存症」に代わって

「嗜癖（しへき）」という考え方がしばしば用いられる。依存対象が薬物やアルコールばかりでなく、パチンコを含むギャンブル依存、買い物依存、インターネット依存、セックス依存など様々な行為が嗜癖の対象になり、特に若者の間に広がっている。外部の規範から開放されて自由になった反面、自己責任がかぶさってきた。この重圧から解放される手段の一つとして依存症が増え続けている、という分析である。今回紹介したYさんのように「パチンコを楽しむ」という心の余裕を持った生き方が送りにくい世の中になっていることは否定できない。

柏木勇一（かしわざい ゆういち）

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業（Employee Assistance Program）でカウンセラー及び研修講師として活動。  
厚生省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士